

その他

占守島の戦闘

愛知県 土橋治雄

昭和二十年八月十五日に終戦、その三日後の八月十八日に進攻してきたソ連軍と、当時のわが国の本土の最北端の占守島でし烈な戦闘をまじえた日本軍があったことを知る人は少ない。

私が現役兵として当時の満州の新京（長春）にあった関東軍独立守備隊第七大隊第二中隊に入営したのは昭和十九年一月十八日のことである。

入隊一週間後、中隊主力のいる熱河省喀喇沁中旗にて初年兵教育を受けながら勤務していた。紀元節の行事

も終わった二月十二日、移動命令があり、新京に集結することになった。

新京の隊内は先着した中隊もあり、騒然たる状況となった。被服の受領、糧食・弾薬の受領と初年兵の私などは目のまわるような忙しさである。

軍装検査も終わり、二月二十一日新京を出発、釜山へ。玄海灘を渡り博多へ。博多より列車の人となり一路東へ東へばく進する。輸送間は列車のよろい戸をしめ、一時間に五分換気のために戸を開けていどで、風景など眼中にはいらなかった。青森着、青函連絡船と乗りついで三月三日小樽着、宿舎の良徳寺にはいった。

兵器、弾薬、糧秣等の輸送船「メルボルン丸」に積みこみも終わり、三月十日乗船、小樽港を出港、途中大湊港に寄港、ここで船団を編成した。船団は我々の「メル

「ホルン丸」と「高島丸」の二隻と、それに護衛として海軍の駆潜艇二隻がつく。この四隻が大湊港を出たのは四月七日の夜だった。対潜監視を嚴重にしながら、荒れ狂う北の海を航行、四月十六日温称^{オシネ}古丹島^{コダン}に上陸、同島の守備につく。七月二十三日同島から乗船、占守島に上陸した。

占守島は南北三十キロ余り東西二十キロ、周囲百キロの小島である。全島ならかなな丘陵が起伏し、もつとも高いところで海拔百九十メートルしかない。五月まで雪におおわれていた島の丘陵も、六月になると緑が顔を見せ始め、這松や榛の木が多い。高さが一メートル内外の這松は長さが三、四メートルもある。それらがところどころに群生しており、その間に草原があり、名も知らない高山植物が咲き乱れる。この頃がよい気候で、暑からず寒からずの日がつづく。真夏になってもいつでも夏服を必要とせずに冬服ですむような気温であった。

その夏季は濃霧の季節でもある。その霧は乳白色でどまっている時もあり、静かに風に乗って流れるときもある。今まで温かであったのに急に寒くなる。

十一月ともなると大吹雪に見舞われる。一晚の吹雪でいままでの地形がガラリと一変する。快晴の日に近くの丘にのぼると海をへだてて東北にカムチャッカ半島がみえ、カムチャッカ富士が望まれる。東北方には阿頼度富士がみえ、その光景はまさに一幅の名画を思わせ平和そのままである。

昭和二十年にはいると米軍機が、たいきよ編隊を組んで昼間堂々と爆撃にやってくるようになった。迎撃に飛び立った友軍機が敵機を撃破したこともあったが、内地転用のためか友軍機の数もへって、物資集積地や港湾施設船舶などが目標となり、我々はただ見守るばかりであった。

当時、占守島の兵力配備は独立歩兵五個大隊、戦車十一連隊、師団第一、第二砲兵隊、師団工兵隊等約八千人が布陣していた。

陸軍の上陸防禦戦はもっぱら「水ぎわ撃滅」が主であったが、南方戦線の相つぐ苦戦の貴重な教訓から「面式防禦」方法を生み出した。すなわち兵力を水際に疎散、だが堅固で敵側からまったくみえない岸壁や小さな起伏

を利用して波打ちぎわを側面から射撃できる火点を配置する。そして敵が上陸してきたらこれらの火点をふい急襲的に活動させて組織と計画を混乱におとし入れる。主力は海岸に適宜間合いをもった位置まで奥深くにわたって小部隊ごとに配置し、敵を広い面においてとらえ、混乱を増大させる。敵味方入り乱れた乱戦状態に早く敵を引き入れる完全なるねわざである。相手の長い槍を封じてわが短刀でいきなり敵の脇腹をえぐる。つまり得意の近接戦闘で敵の死命を制する戦法だ。

北千島は半年ねわざで頑張れば冬が来る、冬になると敵の後方支援や補給はとせつする。だから支援と糧道を断っておいてとくいの冬期戦でたたかえばたたかいに勝てるという寸法である。ここに北方島しょ作戦の勝ち目を見出していた。

終戦二日後の八月十七日、堤師団長は各部隊を師団司令部に集めて終戦という異常事態に対する将兵の心構えや終戦処理全般にわたる命令指示を与え、一切の築城作業の停止を命令した。このことは私達の知るところではなかった。

八月十八日に部隊長の訓示があるので三塚山の本部前に集合せよとの通達があった。しかしこの日の未明にソ連軍の侵攻があったのである。我々は日本の無条件降伏のことも知らずにこの戦闘に参加した。

敵の猛攻にもかかわらず、よく構築された精強な部隊が守りかためていた国端岬や四嶺山の拠点は、最後まで確保されて敵の突進を阻止した。

占守島守備隊は勇敢にたたかったが、なに分にも終戦後のたたかい、軍の停戦命令、ソ連軍との交渉も幾度かわされたがうまくいかず、最初の攻撃から丸二昼夜を経過した八月二十日夜に発砲が停止された。我々が祖国日本の国土を死守したこの一戦は、ソ連の本土への武力侵攻の野望を徹底的に粉砕したのである。

八月二十一日、杉野旅団長は各部隊に対し、「各部隊は停戦協定に基づき、それぞれ駐屯地に復帰して命令を待つべし。」との命令であった。

武装解除は二十三日三好野飛行場でおこなわれることとなり、占守島守備隊全員は十一時飛行場に集合し、全

兵器、弾薬を並べた。

十一時五十分旅団長杉野少将到着、一万三千人の将兵が居並ぶ前を蒼白なおもちで入場、最後の別れの闊兵をおこなった。引き続き杉野少将の指揮ではるかに皇居を拝し、君が代を奉唱、つづいて訓示がおこなわれた。これがソ連軍南下を阻止し占守島防衛の重任を果たした日本軍最後の瞬間であった。

ソ連軍師団長グネチコ少将はジープで入場、これを迎える杉野旅団長に握手する姿をみて、われら日本軍将兵は戦闘に勝ちながら敗者に武装解除を受ける皮肉な事実之感無量で言葉はなかった。かくて一時間にわたる武装解除も終わり、各部隊はそれぞれの宿营地に引き揚げた。

武装解除された私達はソ連側の指示によって部隊を解散、逐次各地に集結させられ作業大隊が編成された。大隊は准尉を長とする四個中隊（一個中隊二百五十人）編成の約一千人とされ、各隊将校のみの将大隊も編成された。

作業大隊は九、十月は島内のソ連軍兵舎の設営や道路

構築などを続けた。十一月より逐次シベリヤ方面へ大隊単位で輸送された。

私たちの大隊も十一月二十七日ソ連船「スターリングラード号」という貨物船に乗船、ナオトカ港に入港した。これが二年半にわたる収容所生活の始まりである。

私の軍隊生活の思い出より

東京都 後藤 三雄

私は自分の軍隊生活をみて、当時大日本帝国の忠勇な軍人であったかと考えるとまったくそんな自信がない。

まじめに任務は果たさなければならぬとは思っていたが、国家の大事を自覚しいちずに軍務に精励するほどでもなかった。体罰などをなるべく受けたくないよう、古参兵、上等兵などの多少の無理難題は「無理が通れば道理が引っこむ」とさからわぬよう、いわれるままに振るまい、立ちまわっていたに過ぎない。

しかし僅か二年半ばかりの期間のことだが、その記憶